

二年ほど前から新型コロナウイルスが猛威をふるい、ある意味コロナは日常化してしまいました。私達はウイルスに感染しないように気を付けて生活することが当たり前になりました。中学校生活は休校から始まり、その中で行われた入学式は、たぶん一生忘れられない出来事の一つとしてこれからも私の心に残ると思います。

学校が休校になったことで、私の生活も大きく変わりました。突然、塾の授業がオンラインになり、受講するのに悪戦苦闘したこと、ちよūdよいサイズのマスクを手に入れるのに奮闘したことなど、大変なことが次から次へと起こったことが思い出されます。そして言うまでもなく、生活はだんだんとだらけてしまい、ユーチューブを見て過ごす時間が増えました。同じ年代の子が配信している動画を見て共感することで、誰かとつながっているという安心感を求めているのかもしれない。買い物も、外に出掛けられないので、インターネットで注文することが多くなりました。スマホの画面を指でさあつとスクロールすれば、次から次へと商品が見られ、思っていたよりもずっと便利です。お店に出掛けるよりもじっくりと見ることができるので、あつという間に時間が経っていて、びっくりすることもよくあります。もし、世の中がコロナ禍になっていなければ、こんなに通信販売を利用することもなかったのかもしれない。おかげで、それまで本当にアナログ生活を送っていた父や母も、少しだけこの現代のスピード社会に加われたような気がします。ただ、少しでも分らないことがあると、すぐに私に聞いてくるのがうんざりです。あまりにも何回も聞いてくるので、

「もう。少しは自分で調べてやってみて。」

と親に対してきつく言ってしまうことも多々あります。でもその後、いつもしよんぼりしてしまうので、すぐに、

「どれえ。」

と声を掛けてしまう私がいいます。いつもこのようなやり取りの繰り返しです。

そして、ウイルスの感染、拡大が広がる中、世界ではすごい速さで研究が進み、ワクチンが開発されました。医療従事者や高齢者から順番に接種が始まりました。副反応を心配しながらの接種となりました。やはり、母も二度目の接種を終えた次の日、発熱、頭痛、倦怠感に襲われました。私が朝起きてみると、いつもキツチンにいないはずの母がいませんでした。そつと寢室をのぞいてみると横になっていいます。

「大丈夫。」

「ううん、大丈夫だと思うけど、頭と腰が痛くて。」

と言って起き上がれない様子でした。いつもなら少しぐらい頭が痛くても、薬を飲んで少し横になれば復活して家事をこなしているのに、その日は様子が違いました。そんな母の姿を目の当たりにした私は、よし、今日は休みだし、自分で朝ご飯を作ろう、そう思いました。食パンがあったので、フレンチトーストを作ることになりました。分量はインターネットで調べました。とてもおいしくできたので、ぱくぱく食べました。すぐく元気ができました。昼ご飯は父がお弁当を買ってきてくれました。

夕方になってもまだ母は、

「頭が痛い。腰も痛い。」

と言って起きられませんでした。父が、

「晩ご飯どうするかねえ。」

と困った顔で言ったので、

「私が作る。カレー作る。」

思わずそう言ってしまうました。とは言ったものの、私はそれまで

一度もまともに料理などしたことがありません。母に何度か手伝うように言われたことがありましたが、だいたい途中で、「包丁で切るのが怖いもん。嫌だ。」

と言っただけで逃げました。以前、ピーラーで皮をむいていて、うっかり手を切ったし、炒め物や揚げ物は油がぴちぴち飛んできて熱いし、怖いことばかりだから料理は大の苦手なのです。でも、その日はなぜか、やつてみようという気持ちになりました。朝ご飯のフレンチトーストがうまくできたからでしょうか。それとも、具合の悪い母を思っただけか、家族のためなのか、今考えても不思議です。とりあえず、カレーの材料があるかどうか確認しました。じゃがいも、にんじん、たまねぎ、お肉、カレーパウダー、すべてありました。よし、やつてみよう。なんだかわくわくしてきました。作り方はカレーパウダーに書いてある説明を見ました。まず、じゃがいもの皮むきです。ピーラーで手を切ったあとの恐怖が頭をよぎります。なので、包丁で切るようにむきました。にんじんもなんと皮をむいて切りました。たまねぎも切ったので、いよいよ炒めます。いつもは怖いぴちぴちと跳ねる油も、手を伸ばしたり引っ込めたりして、きやあきやあきいながら克服しました。やっとの思いで分量どおり水を入れて煮込み、パウダーを入れたら完成です。全部一人で作ることができました。

一番に、母のところへ持っていききました。

「カレー作ったよ。食べられる。」

「えっ。彩ちゃんが作ったの。すごいじゃん。食べる食べる。食べるよお。ありがとう。」

そう言っただけで母は一口、また一口、おいしそうに食べてくれました。

「おいしい。すごくおいしいよ。じゃがいもの皮、むけたの。すごいじゃん。」

「まあ怖かったけどね。こうして切るようにしたの。」

「おお、成長したねえ。」

母がおいしいおいしいと言っただけで食べてくれるのを見て、胸がいっぱいになりました。自分で作ったカレーは、たぶんおいしかったと思っただけで、なんだかうれしすぎてよく覚えていません。そういえば今まで、母にご飯を作ってもらっても、ありがとう、なんて言ったことなかったな。まあ照れくさいからこれからはたぶん言わないと思っただけで、もう少し感謝しないといけないのかな。食べながらふと、そんなことを思いました。

次の日の朝、目が覚めて二階から降りていくと、いつも通りキッチンには母の姿がありました。よかった。ほっとしました。窓から入ってくる日差しがまぶしくて、とても気持ちのよい朝でした。やればできるじゃん、私。頑張ったよ、私。

今までいつもやりたくないことに対して、いろいろな理由をつけて逃げてばかりいたけれど、思いがけずうまくできたことで、私でもやればできるのかな、という思いが芽生えた瞬間でした。これからは家族にはたくさんのわがままを言ってしまうと思うけど、また私を頼ってもらえるように、私もみんなに優しくできるように心掛けよう、そう思うようになりました。